

ホメロスの作品は口伝と言われていますが、本当にあんなに膨大な文章を暗記して歌っていたのですか？

➡ 質問には、複数の要素が絡んでいるので、一つ一つほぐしながら答えてみましょう。

(1) ホメロスは作者か？

『イリアス』や『オデュッセイア』は、一定の韻律に支配されており、もともと口誦叙事詩でした。しかし、作品を織りなす言語は同一の時代や地域に属するものではなく、様々な時代の複数地域の言葉からなる混合体です。日常語とは異なり、まさにホメロスの言語としか言いようがない伝統的な産物です。一人の人物がゼロから生み出したものではありません。したがって、両叙事詩の作者をホメロスだとするのは、便宜的な習慣です。

(2) 口誦と口伝

口誦にたずさわる吟遊詩人は、ラプソドス(もしくはアオイドス)と呼ばれていました。その姿は、『オデュッセイア』にも歌われています。主人公オデュッセウスの屋敷では、ペミオスなる吟遊詩人が竖琴を片手に、トロイアに遠征した英雄たちが帰郷の航海で味わった艱難辛苦の物語を吟じます(第1巻326-327行)。第8巻で、主人公は漂着したパイアケス人の国で盲目のデモドコスの歌うトロイア戦争や神々の物語に耳を傾けます。ペミオスやデモドコスは、吟遊詩人の自己投影なのでしょう。『イリアス』においても、アキレウスが吟遊詩人さながらに竖琴を弾じながら英雄たちの武勲を歌っています(第9巻189行)。彼らは歌詞をそらで吟じていて、文字に頼っているようには見えません。そもそも文字についての確かな言及は、ホメロス作品のなかには見

当たりません。むしろ、文字のない社会が前提となっているようです。じっさい、フェニキア文字をもとにしたギリシア語アルファベットが発明されるのは、ようやく前9世紀になってからだと言われます。すくなくともその発明以前は、アルファベットに頼らずに叙事詩が伝えられていたことを意味します。そして、文字の発明後ただちにこれだけ長い作品が系統的に文字化されたとは考えにくいのです。

(3) 暗記

文字がない状態で長い作品を記憶するのは、文字社会に生きる我々には至難の業だと思われるかもしれませんが、とはいえ、文字がない口頭文化では、逐語的・逐字的な暗記は重んじられなかったという見方も可能でしょう。じっさい、無文字状態で生きている吟遊詩人たちによる同一の歌の口誦を二度録音すると、完全に逐語的に再現されることはないにもかかわらず、彼らは同じ歌を再現したと主張することが報告されています(W. J. オング〈桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳〉『声の文化と文字の文化』〈藤原書店、1991年〉pp.130-131)。また、ホメロス作品の少なからぬ部分は韻律構造に適した定型句によってできています。こうした定型句を数多く習得することによって、記憶の労力を節約することもできたでしょう。また、定型句を組み合わせて即興的に詩句を作り上げることもできたでしょう。そもそも「ラプソドス」は、動詞「ラプトー」(縫い合わせる)と名詞「オーデー」(歌)を合成した語で、「歌を編み上げる人」が原義です。ラプソドスは、自由自在に定型句を用い、ホメロス叙事詩に相応しい伝統的な言葉遣

いを身につけていなければなりません。叙事詩の相当な部分が定型句による無駄のない組み合わせでできていることは、アメリカの研究者パリーが示しています(Milman Parry, *The Making of Homeric Verse*, Oxford 1971)。また、プラトン作『イオン』に登場するラブソドスのイオンは、プロの芸人であり、華やかな衣装をまとい、大勢の聴衆の前で口演していました。そして、単にホメロス叙事詩を吟ずるだけでなく、解説もしていたようです。他方で、創作者としての役割は小さかったようです。

どのような実態だったかは分かりませんが、ソクラテスの弟子の一人であるクセノポン(前5世紀後半から前4世紀前半に活躍)によれば、前5世紀のアテナイにおいて『イリアス』や『オデュッセイア』を暗唱していた市民もいたようです(『饗宴』第3章第5-6節)。ニケラトスは、「父は私が良い人間になるように配慮しましたので、私がホメロスのすべての詩行を学ぶように仕向けたのです。そして今でも私は、『イリアス』と『オデュッセイア』の全編を暗唱することができます」と語っています。誇張も含まれているかも知れませんが、ニケラトスは、「ほとんど毎日」ラブソドスの口誦を聞いていたようです。同じクセノポンが著わした『ソクラテスの思い出』(第4巻第2章第10節)においては、若い蔵書家がホメロス叙事詩の本を集めたと言われています。したがって、前5世紀には書物を用い、文字を頼りにして暗唱に努めることは可能でした。

(4) パナテナイア祭(Panathenaea)

(3)でも見たように、ギリシア人のあいだでは、ホメロス叙事詩が人格形成に必要な教養とみなされていました。前4世紀の弁論家リュクルゴスもまた、「詩人は人間の生き方を再現し、最も佳き行いを選び取り、証しとなる言葉をもって人々を説得する」という理由で、自分たちの父祖たちが、ホメロスを特別に重要視していたことに触れています。そして、「他のすべての詩人をさし置いて、4年毎にパナテナイア祭でホメロスの詩が朗唱されるように法を制定した」と述べています(『レオクラテス弾劾』102節)。アテナイでは、守護神アテネに奉げられたパナテナイア祭で体育と音楽の競技会が4年毎に催されていました。この祭典におけるホメロス作品の

口誦は、伝プラトン作『ヒッパルコス』(228b4-c1)によれば、ペイシストラトスの子ヒッパルコス(前514年没)が創始しました。「ラブソドスたちが、今日もなおそうしているように、順々に担当を受け持って叙事詩を歌い通すようにさせた」と述べられています。しかし、『イリアス』は1万5千行以上、『オデュッセイア』は1万2千行以上の長大な作品ですから、歌い通すには相当な時間を要し、聴く方も大変だったと思われる。宴席などで楽しめるような口誦は、作品のごく一節に過ぎず、全編を通して聴く機会は、パナテナイア祭のようなポリスの公式行事に限定されていたのかも知れません。

(5) 書物化と編纂

(3)でも見たように、前5世紀のアテナイでは、ホメロス作品は本になっていたと思われるが、書物化と本文の固定化の過程を見極めることは困難です。前1世紀のローマの著作ですが、キケロ『弁論家について』(第3巻第137節)においては、ペイシストラトス(前527年没)は「それ以前まで混乱していたホメロスの本を現在ある形に整えた」ことになっています。この証言を信ずるならば、ペイシストラトスによる本文の標準化と定期的なパナテナイア祭の通し公演によって、ホメロス作品の形は固定化し、その形が確認・継承されたと考えられるでしょう。

それでは、標準化以前の本が「混乱していた」状態とはどんなものだったのでしょうか。異本が存在し、本によって伝えている言葉や内容が異なっていたのかもしれない。本来ホメロス作品は口誦詩でしたから、詩句や筋の細部はある程度ラブソドスの裁量に任せられ、流動的だったと考えるのが自然です。文字による記録が始まったのがいつのことなのかは不明ですが、写本は初めから口誦につきまとう本文の揺れを必然的に含んでいたのでしょう。

もっともアテナイで書物化されたとはいえ、この他にマルセイユ、キオス、アルゴスなど都市ごとに異本は存在しました。さらに標準化が進むのは、ヘレニズムの時代です。その担い手になったのは、前3世紀から前2世紀にかけてアレクサンドレイアで活躍した文献学者(アリストアルコスなど)です。

(ひゅうが・たろう／東京大学大学院人文社会系研究科教授)